

ドイツにおける『児童の世紀』の受容状況（1）

—— 1902年から1992年まで ——

岡 部 美 香

(教 育 哲 学)

(平成14年5月16日受理)

“Das Jahrhundert des Kindes” in Deutschland

—— 1902~1992 ——

Mika OKABE

はじめに

エレン・ケイ (Key, Ellen Karolina Sofia 1849-1926) の『児童の世紀』(Barnets århundrade 1900) は、今日、教育学の古典的著作としてよく知られている。この著作について、スウェーデンの教育学者レングボルン (Lengborn, Thorbjörn 1919-) は、次のように述べている。「外国では『児童の世紀』はスウェーデンにおけるのとまったく異なる浸透力をもった。国際的にみてエレン・ケイがもっとも重要な意味をもったのはドイツであった。」⁽¹⁾ レングボルンが言うように、20世紀初頭、『児童の世紀』という著作をもっとも積極的に受容したのはドイツであった。そして、『児童の世紀』についての研究が質量ともにもっとも盛んに行われてきたのもまた、ドイツだったのである。

なぜ『児童の世紀』がドイツで積極的に受け入れられたのか、という点に関しては、これまでもさまざまな見解が示されてきた。ケイの人格的魅力にはじまり、人々の心に訴えかけるような彼女の文体、『児童の世紀』がドイツの誇る新旧の思想家ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832) とニーチェ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm 1844-1900) の思想をとり入れていたこと、あるいはまた当時のドイツにおいて一世を風靡していた進化論や社会有機体説、そして最新の人間学とみられていた優生学をとり入れていたこと、さらには人口問題や社会の産業化が引き起こす諸問題など当時の人々の危機意識をかき立てずにはいなかった社会問題をとり上げ、その解決手段として教育を論じたこと、などである。ただし、『児童の世紀』がドイツで積極的に受容された理由に関しては、これまで提示されてきた諸見解を指摘するだけにとどめておきたい。

むしろ、本論で注目したいのは次の点である。ドイツの人々は、『児童の世紀』がはじめて

翻訳された1902年から現在にいたるまで、ほぼ一貫してその関心を『児童の世紀』のある特定の部分に注いできた。その特定の部分とは、世代関係、すなわち子どもと大人の関係である。子どもをどのように捉えるか、そして子どもとどのように関わるか、という問題は、未来という時間に対してどのような態度をとるか、未来とどのように関わって生きるか、という近代の大人にとっては非常に本質的な問題と深く連関している。

以下では、ひとまずその本質的な問題には立ち入らず、『児童の世紀』の描く子ども—大人関係への関心がドイツにおいて時代とともにどのように変遷していったかという事実過程をおっていききたい。その際、考察の対象とする期間を、本論では、『児童の世紀』の独訳書の初版が刊行された1902年から、現代ドイツの教育学者ヘルマン (Herrmann, Ulrich 1939-) 編集の独訳書・復刻版が出版された1992年までとする(独訳書の出版状況については、次の第1節を参照されたい)。1992年以降については、また稿を改めて考察したい。

ところで、日本における『児童の世紀』の受容に対しては、ドイツにおけるこの著作の受容状況が大きな影響を及ぼしている。明治末期、日本に『児童の世紀』を紹介したのは、大村仁太郎 (1863-1907)、小西重直 (1875-1948)、谷本富 (1867-1946) らであったが、彼らはみな『児童の世紀』の独訳書が出版された1902年前後にドイツに留学していた人々であった⁽²⁾。また、戦前、戦後を通じて、日本の教育学界がドイツ教育学界の強い影響のもとにあったことは周知の事実である。日本独自のケイ研究がこれまで本格的に行われてこなかった以上⁽³⁾、ケイや彼女の著作についての評価がドイツからの影響を受けるのは、ある意味、当然のことであったといえよう。こうした日本との関連にも触れながら、1902年から1992年までのドイツにおける『児童の世紀』の受容状況を振り返ってみたい。

第1節 出版状況

まず、ドイツにおける『児童の世紀』の出版状況を簡単にまとめておきたい。『児童の世紀』がスウェーデン語からドイツ語に翻訳されたのは1902年のことである。この独語訳『児童の世紀』“Das Jahrhundert des Kindes”の初版本は、ベルリンのフィッシャー出版社 (S. Fischer Verlag) から上梓された。これは、スウェーデン語の初版本を底本として訳されたものであるが、完訳ではなく、一部削除されていたり、順序が入れ代わったりしている部分がある⁽⁴⁾。ただし、こうした変更はすべて原著者であるケイ自身が了承していることであった。また、訳者のマーロー (Francis Maro 本名は Marie Franzos) はケイの親しい友人で、ケイの他の著作の翻訳も手がけており、ケイの思想をきわめて深く理解していたと思われる。さらに、彼女はいくつかの訳語の選出にあたっては、手紙のやりとりのなかでケイと相談しながら決定している⁽⁵⁾。これらのことから、この『児童の世紀』の独訳書は、翻訳書であるといえども、ケイの思想をほぼ正確に伝えるものだと考えてよいであろう。

初版刊行以降の『児童の世紀』独訳書の重版状況を年表にすると次ページの表のようになる⁽⁶⁾。この年表をみると、1902年から今日にいたるまで一貫してマーロー訳の『児童の世紀』が読み継がれてきたことがわかる。また、『児童の世紀』独訳書の重版が、第一次世界大戦前に集中していたこともこの年表から読みとることができる。この現象についての解釈は、本論の第2節で考察することにした。

“Das Jahrhundert des Kindes”の出版および重版の状況

- 1902年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 1.-2. Aufl.
- 1903年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 3.-4. Aufl.
- 1904年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 5.-6. Aufl.
- 1905年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 7.-13. Aufl.
- 1907年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Volksausgabe in gekürzter und veränderter Form, Uebertragung von Francis Maro, Berlin) (1.-10. Tsd.)
- 1908年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 14. Aufl. (27.-28. Tsd.)
- 1911年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) 15. Aufl. (29.-30. Tsd.)
- 1921年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) (31.-33. Tsd.)
- 1926年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Uebertragung von Francis Maro, Berlin) (34.-36. Tsd.)
- 1978年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Königstein/Ts.)
- 1992年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel)
- 2000年 “Das Jahrhundert des Kindes” (Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel, Beltz Taschenbuch 28)

さて、ドイツにおける『児童の世紀』の受容の歴史は、その受容の仕方にみられる特徴によって、第1期(1902年から1920年代まで)、第2期(1930年代から1980年代前半まで)、第3期(1980年代後半から現在にいたる)というように、大きく三つの時期に分けることができる。以下では、第1期、第2期、そして第3期の始まりにおける『児童の世紀』受容の特徴について考察していくことにしよう。

第2節 受容 第1期(1902年から1920年代まで)

—子どもへのまなざしの開示—

1902年の独訳書初版の出版から第一次世界大戦が開始されるまでの約10年間は、ドイツにおいて『児童の世紀』が爆発的な売れ行きを示した時期であった。独訳書の重版数だけでなく、貸し出し文庫の記録からみても、当時もっとも読まれた本の一冊だったといわれている⁽⁷⁾。

読者となったのは、主として教養市民層⁽⁸⁾の女性たち、そして旧教育や旧道徳に批判的な

青年たちであった⁽⁹⁾。後者のなかには理論家あるいは実践家としてドイツ新教育運動に携わった人々もおり、とりわけ自由学校共同体ヴィッカーズドルフ (Freie Schulgemeinde Wickersdorf) のヴィネケン (Wyneken, Gustav 1875-1964) やオーデンヴァルト校 (die Odenwaldschule) のゲヘーブ (Geheeb, Paul 1870-1961) は、ケイと直接的な接触のあったことが知られている⁽¹⁰⁾。彼らに共通する特徴を抽出するならば、それは伝統的な家父長制の父子関係に代表される権威的な大人-子ども関係に批判的だったという点である。

『児童の世紀』が彼らに受容された理由も、まさにそこにあったといえよう。『児童の世紀』は、子どもたちを玉座に据え、大人は彼らに額ずかなければならない、というように⁽¹¹⁾、極端な子ども中心主義思想を説くものであった。そしてまた、この著作は、それまで大人たちの依って立つ基盤であった宗教的あるいは伝統的な権威のもつ価値を否定し、科学的な実証性をすべての現象の根拠におくべきだ、と主張するものであった⁽¹²⁾。こうした『児童の世紀』の主張に、人々は旧来の大人-子ども関係の転換を迫る革命的な性格を読みとったのである。『児童の世紀』の熱心な読者たちにとって、ケイはまさに子どもと青年の擁護者であった。

むろん、一方では『児童の世紀』の主張に対して批判的な人々もいた。そのなかには、当時ベルリン大学の教授であったパウルゼン (Paulsen, Friedrich 1846-1908) やミュンヘン大学の教授であったフェルスター (Foerster, Friedrich Wilhelm 1869-1966) らが含まれている。彼らは伝統的な家父長制に基づく大人-子ども関係や道德規範を支持する側であった⁽¹³⁾。家父長制の伝統を固守しようとするパウルゼンたちの意識が、子どもおよび青年の擁護者たるケイとその支持者たちの立場からどれほど隔たったものであったかということ、ノール (Nohl, Herman 1879-1960) は次のように述懐している。「また、当時年長の世代がそれ (青年運動の始まりであるワンダーフォーゲル) をどのように受けとっていたかは、1907年に著されたフリードリッヒ・パウルゼンの『父親たちと息子たち』にもっともはっきりとみることができ。パウルゼンは、この二つの世代の断絶を解き明かそうとした。しかし、彼は青年に否定的な側面しかみておらず、それゆえ青年の擁護者であるルードヴィッヒ・グルリットとエレン・ケイはもっとも深いところではパウルゼンに背を向けていた。・・・(中略)・・・青年の思いが過熱するのを正当にも彼に拒ませたものは、剛毅な人間の強い男性的意識、すなわち、男は男どうしのつきあいのなかでのみ育まれ、強い意志は従順という学校においてのみ育まれる、という意識であった。しかし、シュテークリッツにおける最初の発端が瞬く間に展開してこの運動 (青年運動) になったとき、パウルゼンはもはやその積極的な意味を理解しなかった。」(括弧内は引用者)⁽¹⁴⁾ このように考えていたパウルゼンの目には、古いものの価値をすべて否定し、社会をまったく新しいものに造りかえるという革命的かつ急進的な主張を唱えるケイが、忌々しいデマゴグかアジテーターであるかのように映っていたに違いない⁽¹⁵⁾。

いずれにせよ、1902年から1910年代前半までの間、『児童の世紀』はドイツの教育界、思想界においてもっとも衆目を集めた著作の一つだった。この著作をめぐって、その主張を支持する者とそれに反対する者との間で激しい議論が展開されたが、ここで注目すべきは、支持派、反対派のどちらも、『児童の世紀』の子どもの捉え方、そして子ども-大人関係の捉え方に焦点を当て、それを議論の主題としていた点である。『児童の世紀』は、まさに子どもに対する親や教師たちのまなざしをあらためて開かせる契機になった著作だったのだといえよう⁽¹⁶⁾。

本論の冒頭でも述べたように、日本に最初に伝えられたのは、こうした『児童の世紀』のイメージであった。『児童の世紀』だけでなく、ケイを支持する者たちとパウルゼンやフェルス

ターとの間で生じた論争の内容までもがほぼそのまま輸入されているところに、当時の日本教育界に対するドイツ教育界の影響力の大きさをみることができる⁽¹⁷⁾。

ところが、第一次世界大戦を境に、ドイツにおいて『児童の世紀』の人気は急下落する。本論・第1節で記した年表をみると、このことは重版数の激減という現象としても現れている。さらに、ただ人気落ちるだけでなく、ケイの名は「国に敵対する (reichsfeindlich)」という形容詞や「ドイツに敵対する (gegen Deutschland)」という言葉と対になって語られるようになる⁽¹⁸⁾。これは、帝国主義列強間の競争の激化や世界大戦の勃発などによって、ドイツ国内でナショナリズムが昂揚し、全体主義的思想が浸透したことに大きな原因がある。つまり、その結果、外国人であるケイの著作に関心が向けられなくなるとともに、彼女の主唱する急進的な個人主義も祖国ドイツに忠実な国民の形成や祖国愛の形成を妨げるものとして忌避されるようになったのである。1933年のナチスによる政権掌握以降、この傾向がさらに強くなったのはいうまでもない。また、ケイの思想の基底を流れていた調和的な人間観と楽観的な進歩史観が世界大戦の勃発によって疑問視され始めたことも人気下落の一つの要因であったと考えられる。

ただし、『児童の世紀』の人気落ちた要因は、いま述べたような社会的事情だけにあったのではない。ドレービング (Dräbing, Reinhard) は、ケイが『児童の世紀』のなかで提案した女性解放と学校改革のプロジェクトがほとんど実現してしまい、ケイの主張そのものが時代遅れとなってしまったことも一つの要因であったと分析している⁽¹⁹⁾。これは、裏を返せば、ケイの女性解放や学校改革に関する諸提案のほとんどが現実的なものであったということの一つの証左だといえよう。

ところで、ケイの著作に対するそうした否定的・消極的な反応はドイツだけにみられるものではなかった。例えば、ケイが1914年に出版した『戦争、平和、および将来 (Kriget, freden och framtiden)』という著作は、アメリカ合衆国およびイギリスで反戦文書として頒布禁止となり、ヴァチカンの禁書項目に加えられたと伝えられている⁽²⁰⁾。

ところが、欧米諸国のそうした動きとは対照的に、日本では第一次世界大戦後からケイの著作が脚光を浴び始める。1916年の原田實訳による『児童の世紀』(大同館書店)のほかに、『来るべき時代の為に』(本間久雄訳、北文館、1916年)、『戦争平和及将来』(本間久雄訳、大日本文明協会、1918年)、『婦人運動』(原田實訳、大日本文明協会、1918年)、『母性の復興』(平塚らいてう訳、新潮社、1919年)、『恋愛と結婚』(原田實訳、天佑社、1920年)、『若き男女へ』(本間久雄・原田實訳、天佑社、1920年)など、ケイの翻訳書の出版が相次ぎ、重版も比較的盛んに行われた。ここに、欧米諸国とは異なる、そして欧米諸国の影響を直接的には受けない日本独自のケイ思想の受容が展開されることになるのであるが、それについての考察は別稿に譲りたい⁽²¹⁾。

第3節 受容 第2期 (1930年代から1980年代前半まで)

—ドイツ新教育運動の総括期—

第一次世界大戦を境にして『児童の世紀』の内容に対する人々の関心は失われつつあった。しかし、1930年代以降、この著作はそれまでとは違った側面から光を当てられることになる。その動きは、終結期に入ろうとするドイツ新教育運動の歴史的総括の試みとともに始まった。

ドイツ新教育運動を歴史的に総括しようという研究の先駆けとなったのは、フリットナー (Flitner, Wilhelm 1889–1990) の論文「教育改革運動の三つの段階と現状 (Die drei Phasen der pädagogischen Reformbewegung und die gegenwärtige Lage)」(1928)⁽²²⁾ とノールの著作「ドイツの教育運動とその理論 (Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie)」(1935)⁽²³⁾ である。この二人の仕事を皮切りに、ドイツ、とりわけ戦後の旧西ドイツでは、ドイツ新教育運動を主題とした歴史的、思想史的研究が数多く生み出された。これらの研究のなかで、ケイの『児童の世紀』も、ドイツ新教育運動に大きな影響を与えた著作としてその歴史的な意味が問われることとなった⁽²⁴⁾。

この一連の歴史的、思想史的研究を概観すると、ドイツ新教育運動の歴史的展開過程における『児童の世紀』の位置づけについては、ある一定の定説ができあがっているように思われる。その定説について、ここでは戦後のドイツ新教育運動史研究を代表する文献の一つであるシャイベ (Scheibe, Wolfgang 1906–1993) の『1900年から1932年までのドイツ新教育運動 導入的な描写 (Die Reformpädagogische Bewegung 1900–1932 Eine einführende Darstellung)』(1969) の記述に即しながら簡単に説明しておきたい。

この著書のなかで、シャイベは『児童の世紀』について「エレン・ケイのこの著作は教育改革運動の幕開けとなった」⁽²⁵⁾ と述べ、ケイの名前をドイツ新教育運動のパイオニアの一人として挙げている⁽²⁶⁾。というのも、「ドイツにおいても、教育者たる大人たちに呼びかけて子どもおよび教育問題へのまなざしを新たに開いた功績は、当然、この著作に帰せられる」⁽²⁷⁾ べきだからである。

ドイツ新教育運動の始まりにおいて、「子ども」はまさにもっとも重要な鍵概念であった。「『子どもからの教育』は—それ (教育改革運動) はそのように呼ばれてきたのであるが—主にこの教育運動の初期の段階を埋め尽くした。・・・(中略)・・・さまざまな改革の方向性のすべてにおいて、子どもからという強調された方向づけは、改革運動の特徴であり続けた」(括弧内は引用者)⁽²⁸⁾。引用文中にある「子どもからの教育 (Pädagogik vom Kinde aus)」は、ドイツ新教育運動のスローガンとしてよく知られている。このスローガンは、とりわけ運動の初期においてハンブルクの教師たちが中心となって高唱したものである。これは教育を、それまでのように教育者である大人や教科書を中心としたものから、子どもを中心とするものに転換しようとするものであった。ここで、子どもはあらゆる教育および人間形成の原点として新たに発見されたのである。

子どもに対して向けられた人々のこの新たなまなざしは、まさしくドイツ新教育運動の第一段階の推進力であった。そして、このまなざしを開くのに『児童の世紀』は大きく貢献したのである。先にも述べたように、『児童の世紀』の位置づけに関する他の研究者の見解も、シャイベのものとはほぼ一致しているとみてよい⁽²⁹⁾。

ところで、ドイツ新教育運動は、たしかに国際的な新教育の動きと連動しつつ生起、展開したのではあるが、一方ではニーチェ、ラガルデ (Lagarde, Paul Anton de 1827–1891)、ラングベーン (Langbehn, Julius 1851–1907) に端を発する文化批判運動 (kulturkritische Bewegung) を背景にしたドイツ固有の性格ももっていた。文化批判運動とは、ごく簡略的に定義するならば、機械化、機能化、物質主義化した近代的な生活のあり様に文化的、倫理的後退 (Dekadenz) の要因をみようとす 19世紀後半に現れた思想的運動である。この運動の特徴は、概して、ルソー的意味における自然の喪失など生 (das Leben) の形骸化という問題を

教養および人格形成（Bildung）の問題として捉えようとする点にあった。この運動自体は原理的なものにとどまったが、それによって培われた時代意識のなかから青年運動（Jugendbewegung）やドイツ新教育運動が生じ、そのなかで具体的な展開をみることになった。つまり、ドイツ新教育運動は、同時期に生じた一連の文化批判運動の一環であったと捉えることができるのである。

ドイツ新教育運動をこのように文化批判運動との関連から捉えようとする研究のなかでは、ケイの『児童の世紀』は「文化批判から生じた教育学的な諸帰結」のうちの一つに数えられている⁽³⁰⁾。これには、ケイがニーチェの超人論に傾倒していたということも影響している。しかし、いずれにせよ、『児童の世紀』という著作がドイツ新教育運動の初期の推進力になったという点には変わりがない。

ここまで述べてきたように、ドイツにおける『児童の世紀』の受容の第2期においては、ドイツ新教育運動に関する研究とともに『児童の世紀』に関する研究も進展し⁽³¹⁾、ドイツ教育史におけるこの著作の位置づけをはじめ、論述内容や思想的背景が詳細に検討され、さまざまな視点からこの著作に対する理解が深められていった。

その一方で、この著作のもつ弱点もまた、第1期のパウルゼンらのように主観的にではなく、客観的に指摘されるようになった。主に批判されたのは、次の二点である。

まず一つめは、子どもの自律（Autonomie）についての急進的かつ極端な主張である。たしかに、この主張は、教育実践の領域においては、形骸化した学校教育や伝統に固執する家庭教育に対して人々が批判的な目を向ける一つの契機となった。また、教育理論の領域でも、大人の権威（Autorität）に対して子どもの自律を対置させ、その重要性を強調することによって世代関係の転換を図ろうとした点において、この主張は今日の世代関係論にとってもなお意義深い内容を含んでいる。しかし、子どもの自律を極端なまでに主張し、個々の子どもの内にあるとされる自発性（Spontaneität）や創造力（schöpferische Kraft）を絶対的に正当化し信奉することが非現実的であるのもまた確かであった。いみじくもレヒトマン（Rechtman, Heinrich J.）が指摘したように、「自律とは、ケイやグルリットがそれを誤解したように、まったく自然な個性の放縦を意味するのではなく、自分で慣習という法則のもとにおいている良心の権威に基づいた自己規定と自己拘束を意味するのである」⁽³²⁾。こうした批判は、とりわけ客観的精神（der objektive Geist）の人間形成作用を重視する精神科学的教育学の流れを汲む研究者たちから提示された⁽³³⁾。

二つめは、思想的基盤が弱いというものである。『児童の世紀』が、ルソー（Rousseau, Jean-Jacques 1712–1778）⁽³⁴⁾ やスペンサー（Spencer, Herbert 1820–1903）の教育論、ダーウィン（Darwin, Charles Robert 1809–1882）の進化論をはじめとするさまざまな進化思想、そしてニーチェの超人論から影響を受けているということは、ドイツ教育学の領域では周知のこととなっている。しかし、ケイが彼らの思想をそれぞれ十分に理解していたかという点については疑念を抱く研究者が多い。例えば、次のような批判が寄せられている。「現存の教育体制に対する彼女の容赦のない批判、教育改革に対する彼女の諸提案は、水で薄められたダーウィニズムと生半可に理解されたニーチェ、スペンサー、ルソーとの混合に源を発している。」⁽³⁵⁾ 「彼女は、ルソーとダーウィン、スペンサーとトルストイ、ヘッケルとニーチェの諸見解をかき回して混ぜ合わせ粥のようにやわらかい世界観の生地を作り、そこから一つの『新教育』という彼女なりのコンセプトを焼き上げた。」⁽³⁶⁾

この二つの批判から、必然的に次のような問いが生まれてくる。すなわち、そのように極端なケイの見解を、あるいはまた、そのように思想的基盤の弱いケイの新教育構想を、多くの人々が、しかも教養市民層という知的に優れていると自負していた人々が積極的に受容した背景には何があったのか、という問いである。この問いに対すとり組みは次の第3期（1980年代後半から現在まで）において開始されることになる。

ところで、上に挙げた二点以外にも、『児童の世紀』は興味深い観点から批判されているので⁽³⁷⁾、ここにその一つを付け加えておきたい。それは、「この著作は来るべきファシズムを前もって示している」⁽³⁸⁾ というものである。ケイは『児童の世紀』の冒頭で、人類は「世代継承の神聖 (die Heiligkeit der Generation)」に目覚めるべきであり、それによってこそ人間性の改造および人間社会の改善が可能になると主張した⁽³⁹⁾。この主張は、彼女が生命を何よりも重視する生命至上主義を唱えたことの証左であるとみなされ、彼女が「生命の使徒 (An Apostle of Life)」と呼ばれる一つの根拠となっている⁽⁴⁰⁾。ところが、この「世代継承の神聖」が意味するのは、結局のところ、優生学の知識に則った結婚と生殖活動によって、精神的、身体的に「健康でない」子どもを産まないようにし、より「進化」した「健康で」「美しい」子孫を残すということであった⁽⁴¹⁾。つまり、この著作のなかでケイは、男女両性の結びつき、そして子どもの教育を中心とした男女両性の共同生活を、優生学的な—ドイツ的な表現では民族衛生学 (Rassenhygiene) 的な—観点から描いたのである。

こうしたケイの優生学的発想にはナチズムの優生政策と通じるものがあるといえる。この点は、たとえケイの『児童の世紀』とナチズムの政策が直接的に関連していたわけではないにしても、等閑に付してはならないであろう。ケイの論を先駆として「子どもからの教育」をスローガンに掲げたドイツ新教育運動が、一方ではデモクラティックな、そしてヒューマニスティックな側面をもちながら、同時に他方では優生学的発想や政治的権威に対する抵抗力の弱さも併せもっていたという事実。その事実を見据え、ドイツ新教育運動の二つの側面の関連を解明するという課題は、次の第3期、とりわけ2000年前後以降の教育学研究に引き継がれていく。

以上のように、ドイツにおける『児童の世紀』受容の第2期（1930年代から1980年代前半まで）は、ドイツ新教育運動の歴史的総括がさまざまな視点から試みられた時期であった。その試みのなかで、『児童の世紀』の内容、思想的背景、およびその歴史的な位置づけが明らかにされ、同時にまた『児童の世紀』のもつ問題点も指摘されたのである。その問題点をどのように積極的に乗り越えていくかは、1980年代後半からの課題となる。

次節に移る前に、日本との関連についてごく簡単に触れておくと、この時期の『児童の世紀』理解は、ほぼそのまま今日の日本の教育学領域における『児童の世紀』理解に通じるといっても過言ではない。というのも、日本の教育学研究において『児童の世紀』がとり上げられるのは、たいていドイツ新教育運動を主題とした研究のなかに限られてきたからである。ただし、ドイツ新教育運動を主題とした研究のなかでも特にケイだけに焦点を当てたものは、これまでほとんど発表されていない⁽⁴²⁾。

第4節 受容 第3期の始まり（1980年代後半から1992年まで）

—ドイツ新教育運動の超克期の始まり—

さて、ドイツ新教育運動の歴史的な総括がある一定の成果をみたと思われるころから、今度

はドイツ新教育運動がもっていた近代的な教育観あるいはその世代関係の枠組みを超克しようという動きが始まった。これは、哲学の領域におけるポストモダン思想の興隆とその教育学領域への浸透とともに開始された動きであり、ドイツ教育学界はまさにいまこの動きの渦中にある。以下では、この動きの先駆といえる二つの論文を紹介したい。

まず、エルカース (Oelkers, Jürgen 1947-) は、「ポストモダンの再来 新たな世紀末に関する教育学的省察 (Die Wiederkehr der Postmoderne, Pädagogische Reflexionen zum neuen Fin de siècle)」(1987)⁽⁴³⁾ のなかで、『児童の世紀』におけるケイの子どもの捉え方を、文化教育学 (die Kulturpädagogik) やデューイ (Dewey, John 1859-1952) の業績とともに、近年のポストモダンの教育研究の動向を評価する基準点の一つとして挙げている⁽⁴⁴⁾。

エルカースは、論文の始めに一つの仮説を設定する。その仮説とは、目下「ポストモダン (Postmoderne)」というスローガンのもとで、「理性一般」や普遍的な「善」などを想定する近代の合理主義的なモデルが批判的な議論にさらされているが、そうした議論はもうすでに19世紀の「世紀末 (Fin de siècle)」に始まっていたのではないか⁽⁴⁵⁾、というものである。

このように「世紀末」に焦点を定めると、次のことが明らかになる。近代は、普遍的な「善」をめざして人間を形成すること、そして、そのように形成された人間によって未来社会を理性的に構想すること、あらゆる葛藤を言語と現実の厳密な対応関係に基づいて解消すること、などを求めてきた。このとき近代がよりどころとしていた「理性一般」や普遍的な「善」に対する批判は、文学や芸術の領域では、すでに「世紀末」から、主体の死、歴史性の解体、社会的ユートピアの断念、言語と現実の対応関係の崩壊などといったさまざまな観点において企てられていた⁽⁴⁶⁾。

エルカースによれば、「世紀末」の教育学の領域で、そうしたポストモダンの観点を打ち出していた著作の一つが、ケイの『児童の世紀』であった。『児童の世紀』が端緒となって生じた「子どもからの教育」は、子どもの「よさ」を、普遍的な「善」から捉えるのではなく、子どもの内からの発達という観点から理解し、諸力の肯定的な方向への成長を基準にして測るべきだと訴えた。つまり、教育の前提であり「かつ」目的である人格 (Persönlichkeit) を何よりもまず個々の子どもの独自性から捉えようとしたのである⁽⁴⁷⁾。

ただし、「世紀末」に提示されていたこのポストモダンの視点は、たしかに部分的にはポストモダンの論点を受容していたが、その視点をやはり普遍的に定式化しようとしたところに限界をもっていた、とエルカースは指摘する。したがって、今後はそうした視点の時代的、社会的制約を考慮し、多様性を多様性のまま認めていくこと、さらに、たとえアポリアに陥るとしても、すべての公理を否定することなく新しい公理を導入していくことが教育学の命題にとっては必要であると提言して論文は締め括られる⁽⁴⁸⁾。

では、普遍的な「善」から演繹的に子どもを捉えるのではなく、子どもに内在するものから子どもの独自性を理解し、かつそこで得た子ども理解を普遍的に定式化することなくその多様性において認めていくためには、子ども理解に関してどのような公理を新たに導入する必要があるのだろうか。今後展開されるであろうこの問題をめぐる議論は、ケイ、そして新教育が示した子ども理解および世代関係の図式を、極端に子どもの自律を強調する非現実的な論として否定するのではなく、その図式そのものを、新しい視点や様式をとり入れることによって変容させるための一つの端緒になるのではないかと思われる。

次に挙げるのは、1992年に復刻された『児童の世紀』の独訳書にあとがきとしてヘルマンが

寄せた論文「『子どもの尊厳』—エレン・ケイの論争的な挑発 (Die » Majestät des Kindes « -- Ellen Keys polemische Provokationen)」(1992)⁽⁴⁹⁾である。この論文では、『児童の世紀』を子どもおよび教育についての「神話」として特徴づけた点が注目される⁽⁵⁰⁾。この場合、「神話」とは、過去にあったはず、あるいは未来にあるはずの（またはあるべき）事態を描き出すことによって連続した歴史物語を構成し、その歴史物語を読む人々のアイデンティティの形成に寄与する文学形態のことをさしている。

ヘルマンによると、『児童の世紀』は次の四つの小さな神話から成り立っている。それらは、①自然は自己展開するという神話（高尚化としての発達、進歩としての進化）、②自然は完全であるという神話、③道徳的なものとしての始源性という神話、④教育という手段を通して未来を支配できるという神話、である⁽⁵¹⁾。『児童の世紀』がユートピア的な文体を用いてこれらの神話を紡ぎだす作品となったのは、ケイが科学的な立証や理論的な叙述ではなく、人間の思考と行動を意識の深層で規定している本質的なものをみることに重点をおいていたからなのだ、とヘルマンは述べる。そして、そうした神話として『児童の世紀』を捉えると、たとえば思想的基盤が弱い、あるいは論理的根拠に欠けるという欠点をもっていたとしても、この著作が20世紀初頭の人々を魅了し、大きな成功を収めたのは不思議なことではない、と指摘する⁽⁵²⁾。

では、『児童の世紀』が読者のアイデンティティの形成に寄与するべく構成された神話であるとして、その読者とは誰であったのか。ドイツにおける受容の第1期でみたように、『児童の世紀』を受容したのは、主として教養市民層に属する人々（とりわけ女性）と新教育運動に携わった人々であった。そして、彼らに共通する特徴は、旧来の家父長的な世代関係への反発に見出された。では、彼らはなぜそのような神話を必要としたのか。神話という文学形態が連続した歴史物語を構成することによって読者のアイデンティティの形成に寄与する機能をもつということをもとに振り返って考えるならば、彼らは自分が歴史という時間の流れから疎外されていると感じていたがゆえにそのような神話を必要としたのであり、そのような神話を構成することによって彼らは歴史的存在としての自己同一性を回復しようとしたのではないだろうか。

いったい、彼らを感じていた自己同一性の危機とは何だったのか。彼らが子どもの捉え方を旧来のものと逆転させることによってその危機を乗り越えようと考えた背景には、彼らの自己意識と子どもの教育とを結ぶどのような連関があったのか。これらの問いは今日の私たちにとっても十分にアクチュアリティをもつものであると思われるが、その解明は今後の課題として残されている。

ここまで、第3期の受容に関して、『児童の世紀』における子ども理解を現代のポストモダンの議論の先取りとして捉えるエルカースの論文、『児童の世紀』を子どもおよび子どもの教育に関する神話として解釈するヘルマンの論文について、その内容を要約するとともに、残された課題について検討してきた。ここに挙げた二つの論文に共通する特徴は、子どもをどのように捉えるか、そして子どもとどのように関わるかという世代関係についての問いを含んでいる点だといえるであろう。

おわりに

以上のように、本論では1902年から1992年までのドイツにおける『児童の世紀』の受容状況を概観してきた。ドイツにおける『児童の世紀』の受容史は、その受容の仕方によって三つの

時期に分けることができたが、第1期から第3期までほぼ一貫して人々の関心が向けられていたのは、『児童の世紀』が描く子ども—大人間の世代関係であった。ただし、その関心は時を経るにしたがって、旧世代への反発という主観的、感情的なものから、歴史的な意味や教育学的な意味を問う客観的、反省的なものへと推移し、深められてきた。ここにドイツにおける『児童の世紀』受容の特徴をみることができるといえよう。

ところで、1992年以降、とりわけ『児童の世紀』(Barnets århundrade 1900)の初版刊行からちょうど100年を数える2000年前後を中心に、ドイツの教育学界では、『児童の世紀』をめぐる議論が活発化した⁽⁵³⁾。そこでは、『児童の世紀』研究に関する新たな視点や問題点がさまざまな形で提起された。そのなかでも、特に注目すべきだと思われるのが、『児童の世紀』という著作のなかで子ども中心主義的な思想と優生学的な思想がいかに関連していたか、という問題である⁽⁵⁴⁾。この問題が、1980年代にすでに先取りの指摘されていたことは、本論の第3節で述べた。それ以降、この問題をめぐる議論がどのように展開されてきたかについて検討し、そこから今後の『児童の世紀』および新教育運動に関する研究の方向性を探求するという作業は、後日の課題としたい。

むろん、こうした議論はドイツの近代教育あるいはドイツ新教育を反省的に捉え直すなかから導き出されたものであり、したがって、いくらドイツ教育学の影響を強く受けているとはいっても、彼らの論点を現代日本の教育研究の領域にそのままもちこむわけにはいかないであろう。しかし、日本の『児童の世紀』受容がドイツの影響を大きく受けてきたこと、『児童の世紀』がドイツ同様、日本の新教育期に影響を及ぼした著作であること、そして、現代日本においても新教育が依然として「よき教育実践」のモデルとなっており、現在との直接的な連続性を保っていること⁽⁵⁵⁾を考慮するならば、エルカース、ヘルマンらの研究をはじめとする、ドイツにおける『児童の世紀』研究が提示した視点から学ぶところは大きいと思われる。

注

- (1) Lengborn, Thorbjörn, En studie i Ellen Keys pedagogiska tänkande främst med utgångspunkt från "Barnets århundrade", Stockholm, 1977, s.133. (レングボルン, トールビョルン『エレン・ケイ教育学の研究—「児童の世紀」を出発点として—, 小野寺信・小野寺百合子訳, 玉川大学出版部, 1982年, 180頁). なお、訳出に際しては小野寺夫妻の訳書を参照させていただいた。ただし、訳文は必ずしもそれにしたがってはいない。
- (2) 大村仁太郎は1901年—1903年, 小西重直は1902年—1905年, 谷本富は1899年—1903年にヨーロッパへ留学している。つまり、『児童の世紀』の独訳書初版が出版された1902年にはみなヨーロッパに渡っていたことになる。ちなみに、大村はベルリンで(入手年については現在のところ不明), 小西は1902年にライプツヒで『児童の世紀』の独訳書を手入している(ケイ, エレン『二十世紀は児童の世界』, 大村仁太郎解説, 精華書院, 1906年, 6頁。小西重直「エレン・ケイの『児童の世紀』に就て」, 『教育学術界』第4号, 1906年, 16頁)。
- (3) ケイの紹介を目的としたものを除いて、これまで公表されているケイあるいは彼女の『児童の世紀』を主題とした教育学研究論文は、管見の限り、次の五つである。これらはすべて、『児童の世紀』に展開されたケイの理論を、スウェーデンあるいはドイツにおける教育(思想)史のコンテクストに位置づけて考察したものである。中嶋博「ケイの理論」, 金子孫生監修『ペリかん・エッセンス・シリーズ6 現代教育理論のエッセンス 二〇世紀教育理論の展開』, ペリかん社, 1970年, 230—239頁。松崎嶺「エレン・ケイ『児童の世紀』の諸版について」, 『東京大学教育学部比較教育学研究室紀要』第5号, 1979年, 28—

33頁。森田尚人「ケイ『児童の世紀』」, 村田泰彦編『人間の教育を考える 家庭の教育』, 講談社, 1981年, 77-101頁。松崎巖「ケイ『子どもの世紀』を開いた女流思想家」, 松島鈞・白石晃一編『現代に生きる教育思想7』, ぎょうせい, 1982年, 259-296頁。高沼秀正「エレン・ケイの教育思想—その思想的系譜の考察—」, 『愛知県立大学文学部論集—児童教育学科編—』第39号, 1990年, 47-65頁。

- (4) ドイツ語に訳出される際に, どのような変更が加えられたのであろうか。まず, スウェーデン語の初版とドイツ語訳の初版, それぞれの目次構成をみてみよう。

スウェーデン語初版の目次構成

- “Barnets århundrade I” (『児童の世紀 第1巻』)
Företal (『序』)
Barnets århundrade (『児童の世紀』 1.~8. の断章から成る)
Efterskrift (『あとがき』)
Bilaga (『付加』)
“Barnets århundrade II” (『児童の世紀 第2巻』)
Uppfostran (『教育』)
Framtidens skola (『未来の学校』)
Religionsundervisningen (『宗教授業』)
Själamorden i skolorna (『学校における精神の殺害』)
Hemlöshet (『家庭の喪失』)
Böckerna mot läseböckerna (『図書と教科書』)
En återblick och överblick (『回顧と展望』 I~IIIの断章から成る)
Översikt af litteratur i barnpsykologi (『児童心理学文献の概観』)
Bilaga (『付加』)

ドイツ語訳初版の目次構成

- I. Das Recht des Kindes, seine Eltern zu wählen (第1章「子どもが親を選ぶ権利」)
II. Das ungeborene Geschlecht und die Frauenarbeit (第2章「まだ生まれない人類と女性の労働」)
III. Erziehung (第3章「教育」)
IV. Heimatlosigkeit (第4章「家庭の喪失」)
V. Die Seelenmorde in den Schulen (第5章「学校における精神の殺害」)
VI. Die Schule der Zukunft (第6章「未来の学校」)
VII. Der Religionsunterricht (第7章「宗教授業」)
VIII. Kinderarbeit und Kinderverbrechen (第8章「子どもの労働と子どもの犯罪」)
IX. Anhang (Anmerkungen) (第9章「附録(注)」)

両者を比較すると, 次のような違いに気づく。まず, スウェーデン語の原典は, “Barnets århundrade I”, “Barnets århundrade II”と二巻本で出版されているが, ドイツ語訳は一冊の書籍としてまとめられている。このとき, “Barnets århundrade I”の‘Företal’ (『序』), および“Barnets århundrade II”の‘Böckerna mot läseböckerna’ (『図書と教科書』), ‘En återblick och överblick’ (『回顧と展望』), ‘Översikt af litteratur i barnpsykologi’ (『児童心理学文献の概観』)そして‘Bilaga’ (『付加』)の各章が, ドイツ語訳では完全に削除されている。これらの章は, 主としてスウェーデン国内の事情やスウェーデンの児童書などについて論じた部分であり, ドイツ国内の事情と重ならない部分が多く, ドイツの読者の参考にならないという理由から削除されたのではないかと推測される。

そのほかの部分に関しては, 多少, 修正や順序の入れ替えが行われているが, 本文の主要な論述内容という点に限れば, ほとんど変更されていないといえる。内容的には, ドイツ語訳のI. Das Recht des Kindes, seine Eltern zu wählen (第1章「子どもが親を選ぶ権利」), II. Das ungeborene Geschlecht und die Frauenarbeit (第2章「まだ生まれない人類と女性の労働」)およびVIII. Kinderarbeit und Kinderverbrechen (第8章「子どもの労働と子どもの犯罪」)がスウェーデン語原典の“Barnets

århundrade I”に、Ⅲ. Erziehung（第3章「教育」）からⅦ. Der Religionsunterricht（第7章「宗教授業」）までの章が スウェーデン語原典の“Barnets århundrade II”にほぼ正確に対応している。

なお、スウェーデン語の初版本“Barnets århundrade I”の‘Efterskrift’（「あとがき」）と‘Bilaga’（「付加」）の部分は、ドイツ語訳では削除されているのではなく、本文中に適宜組み込まれている。

以上のことから、ドイツ語訳『児童の世紀』の初版本について次のことがいえる。まず、スウェーデン語からドイツ語に訳出される際に削除された部分は主としてスウェーデンの国内事情を説明した部分であること。第二に、論述内容をもても主要な部分はスウェーデン語の初版本とほとんど変わらないこと。第三に、したがって、この翻訳書は、ドイツの読者たちの興味、関心に合わせて再構成されたものだと考えられるが、本文でも述べたように、ケイの思想内容をほぼ正確に伝えるものであること、である。

- (5) Dräbing, Reinhard, *Der Traum vom » Jahrhundert des Kindes « Geistige Grundlagen, soziale Implikationen und reformpädagogische Relevanz der Erziehungslehre Ellen Keys, Frankfurt am Main, Bern, New York, Paris, 1990, S.12f.* ここで、ドレービングは、ケイが手を加えたり、校閲したりしていることから、ドイツ語訳『児童の世紀』を「本質的に（スウェーデン語の原典にはみられないような）それ本来の独自のケイの特色をもっている」（括弧内は引用者）と述べている。

ところで、ドレービングはこの著作のなかで、『児童の世紀』をはじめとするケイの著作の論述内容を当時のドイツの社会的、政治的枠組みのなかで解釈し直し、さらにケイの著作に対する人々の評価を詳細に分析することを通して、『児童の世紀』のなかで展開されたケイの思想がつねに現存の政治体制とは反対側の立場に立つ革命的、革新的な性格をもっていたこと、そして『児童の世紀』に対する批判がつねにその批判者の政治的立場に動機づけられてきたことを明らかにした。著作の末尾において、ドレービングはケイの教育論を、社会変化に向けて努力することの重要性を訴える政治的教育論として特徴づけている（Dräbing, a. a. O., S.475）。このドレービングの著作は、それまで顧みられることの少なかった、社会的、政治的コンテクストにおける『児童の世紀』およびケイの思想の位置づけに光を当てたという点で意義深い研究であるといえる。

- (6) この年表は、ドレービングの作成した図書リスト（Dräbing, a. a. O., S.497）を参照しつつ、1990年以降の出版状況を付加して、筆者が作成したものである。
- (7) Dräbing, a. a. O., S.399. 同じくドレービングによると、著作が広く普及しただけではなく、ケイがドイツで行った講演会もかなりの成功を収めたという。
- (8) 教養市民（Bildungsbürgertum）とは、「十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで『教養』の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育を受けた、ごく少数のエリート層を意味する」（野田宣雄『教養市民層からナチズムへ—比較宗教社会史のこころみ—』、初版第6刷、名古屋大学出版会、1994年、21頁）。ヴェーバー（Weber, Max 1864—1920）によると、「教養（Bildung）」の相違は、当時のドイツで、所有による区分や経済的機能による区分などの階級を形成する要素に比べて、真に身分を形成する重要な相違であり、心のなかでもっとも強力に作用する社会的制約の一つであったという（ヴェーバー、マックス『政治論集1』、中村貞二・山田高生・林道義・嘉目克彦訳、みすず書房、1982年、266頁）。
- (9) たとえば、教護施設（現代の日本では児童自立支援施設と呼ばれる）リンデンホーフ（Das Heim Lindenhof）の指導者として知られるウィルカー（Wilker, Karl 1885—1980）は次のように述べる。「われわれが若かったころ、すなわちまだギムナジウムの最上級生だったころ、われわれは密かに夜の暗闇のなかで『児童の世紀』という本を読んだ。それはわれわれにとって革命のようであった。われわれよりずっと前に一人の女性がそのような本を書き得たのだということが、嘘をついてわれわれを騙す教会、われわれを裏切る学校、われわれを伝統的な市民的理解と意志とへねじ曲げようとする親の家に対する不満の萌芽を自分のなかに抱くわれわれ、すなわち、われわれをとりまく世界に対する不満の萌芽を自分のなかに抱くわれわれにとって喜ばしく、またわれわれ独自の意志と知をたしかなものにした。われわれのなかにずっと貼りついて残っていたのは、次のようなことであった。すなわち、ここで子どもや青年でさえもその独自の権利を獲得したのだ。」（Wilker, Karl, Ellen Key, in : *Das werdende Zeitalter* 5. Jg., Landschlacht, Bodensee (Schweiz), Konstanz (Baden), 1926, S.135.）
- (10) ケイは、1908年の秋にヴィネケンのヴィッカーズドルフを訪れている。しかし、その訪問について書いた手紙には、ヴィッカーズドルフとヴィネケンに対する厳しい批判が綴られていたという（Dräbing, a.

a. O., S.375). ドレービングはケイとヴィネケンの相違を次のように考察している。まず、ケイが子どもの人間性の高尚化をめざしていたのに対し、ヴィネケンは子どもの「客観的精神」への参与をめざしていたこと。次に、ケイの教育思想が子どもからの教育という子ども中心のものであったのに対し、ヴィネケンの方は「教育は闘いであり、子どもを暴力でねじ曲げることだ」と考えていたこと。そして、ケイが大人は子どもにとって模範の役割を果たすと考えていたのに対し、ヴィネケンは指導者の役割を果たすと考えていたこと、である (Dräbing, a. a. O., S.370-376)。前二者は極端に単純化した対比図式であるように思われるが、最後の子どもと大人の関係に関して、ヴィネケンが結局「指導者としての教師 (Erzieher als Führer)」という役割規範から離れて教育関係を捉えることができなかつたのは事実であり、それはまたヴィネケンとゲヘーブの決裂を引き起こした原因の一つでもあった。

一方、ゲヘーブは、リーツ (Lietz, Hermann 1868-1919) のハウビンダ田園教育舎 (das Landerziehungsheim Haubinda) に在職中からケイと文通を通じて親しく交わり、その交友関係はケイが亡くなるまで絶えることはなかつた。ゲヘーブは、ケイのことをハウビンダの予言者 (Haubindas Prophetin) と呼び、敬愛の念を惜しまなかつた (Brief Geheebes an Ellen Key vom 16. 2. 1905)。またケイも、「ゲヘーブの離反によって、ヴィッカーズドルフは私にとってあらゆる価値を失った」という言葉を述べるほど、ゲヘーブの教育者としての思想や実践を評価していた (Dräbing, a. a. O., S.385)。ケイとゲヘーブの最大の共通点は、大人はあくまで子どもの模範であり援助者であるといった子ども-大人間の世代関係の捉え方であった。

- (11) 「子どもの尊厳に対して父親と母親が譲りかねない限り、また子どもという言葉は尊厳という概念の別の表現でしかないということを彼らが認識しない限り、子どもという形態をとって彼らの腕のなかでまどろんでいるのが未来であり、足下で遊んでいるのが歴史であるということを感じない限り、自分たちが、星の軌道に法則を課する力も権利ももっていないのと同様に、この新しい存在に規則を指示する力も権利ももっていないのだということも彼らは理解しないであろう。」 (Key, Ellen, Das Jahrhundert des Kindes, Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel, 1992, S.120.)
- (12) たとえば、ケイは自然科学の成果への期待と信頼を次のように語っている。「ほとんど毎日のように、身体的あるいは精神的な力のさらなる拡大、内的世界と外的世界の密接な相互作用、病気の克服、人生および青年期の延長、身体および精神の成り立ちの法則についての研究など、これまで予想もしなかつた可能性についての新しい報告がもたらされる。・・・(中略)・・・人間の本性はいつまでたっても同じままで、と今日主張する者は、・・・(中略)・・・そのことによって自分が、たとえばどう考えても将来の可能性として人間になるなどと予感しなかつたであろうジュラ紀のイクチオザウルスと同じ程度の反省段階にあることを露呈するのである。」 (Key, Ellen, Das Jahrhundert des Kindes, Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel, 1992, S.12f.)
- (13) パウルゼンとフェルスターは、それぞれ次の文献のなかでケイおよびケイの『児童の世紀』について批判している。Paulsen, Friedrich, Väter und Söhne (1907), Wiederabgedr., in: Ders., Gesammelte Pädagogische Abhandlungen, herausgegeben und eingeleitet von Eduard Spranger, Stuttgart und Berlin, 1912, S.497-516. Foerster, Friedrich Wilhelm, Sexualethik und Sexualpädagogik, Kempten und München, 1913.
- (14) Nohl, Herman, Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie, 10. Aufl., Frankfurt am Main, 1988, S.17f. (ノール, ヘルマン『ドイツの新教育運動』, 平野正久・大久保智・山本雅弘著訳, 明治図書, 1987年, 98頁.)
- (15) 『児童の世紀』を評するときのパウルゼンの舌鋒には苛烈なものがあった。「『児童の世紀』という著作は、数年の間に22000部・・・(中略)・・・ドイツ語版で売れているが、誰がそれを読んでいるのだろうか。・・・(中略)・・・善意に満ちてはいるが通俗的な意見、迫力のある弁舌、極端な弾劾、無批判な批判、あらゆる近代人たちから引用した豊かではあるが未消化の知識、無軌道なうぬぼれと思えばと、それらの間にさしはさまれた健康的な人間理解の話とのこの混合物を、またどの文も別の文と矛盾し、極端な個人主義の要求が社会主義的な理想となかよく並んでいるようなこの混合物を、いったい誰が読めるというのであろうか」 (Paulsen, a. a. O., S.507)。パウルゼンにこれほど感情的、攻撃的な文章を書かせ

ドイツにおける『児童の世紀』の受容状況（1）

るほど、『児童の世紀』は当時のドイツで大きな影響力をもっていたということであろう。ただし、ケイの教育論に体系性のないこと、論理的な根拠の弱いことなど、パウゼンが指摘したことのほとんどは事実であり、それは後世の研究者たちの多くからも批判されることである。しかし、本論の第4節でも述べたように、だからこそ逆に、当時の人々が『児童の世紀』のどのような部分を支持したのかという点は興味深い問いになるのである。

- (16) Scheibe, Wolfgang, *Die Reformpädagogische Bewegung 1900–1932 Eine einführende Darstellung*, 9. Aufl., Weinheim und Basel, 1984, S.52f.
- (17) 大瀬甚太郎 (1865–1944) や本間久雄 (1886–1981) などが、この論争について紹介している (大瀬甚太郎『欧米教育史 (最近世の部)』, 成美堂書店, 1933年, 263–299頁。本間久雄「性的道德の根本問題」, 『早稲田文学』第142号, 1917年9月, 2–16頁)。
- (18) Dräbing, a. a. O., S.407f.
- (19) Dräbing, a. a. O., S.413.
- (20) 小野寺信・小野寺百合子「エレン・ケイについて」, ケイ, エレン『改訂版 恋愛と結婚』, 小野寺信・小野寺百合子訳, 新評論, 1997年, x–xi.
- (21) 日本における『児童の世紀』の受容状況については、次の拙稿を参照されたい。「日本における『児童の世紀』の受容状況（1）1906–1910年代初頭 – ドイツ留学者たちによる紹介」, 世界教育連盟日本支部編『教育新世界』第49号, 2001年, 45–55頁。「大正期の日本における『児童の世紀』の受容状況 – 母性主義思想の展開との関連に焦点づけて」, 教育史学会第45回大会 (上越教育大学), 研究発表レジュメ, 2001年。
- (22) Flitner, Wilhelm, *Die drei Phasen der pädagogischen Reformbewegung und die gegenwärtige Lage*, (1928), in : Ders., *Die Pädagogische Bewegung, Beiträge – Berichte – Rückblicke*, Besorgt von Ulrich Herrmann unter Mitarbeit von Christoph von Bühler und Meike Werner, Nachwort von Ulrich Herrmann, Paderborn, München, Wien und Zürich, 1987, S.232–242.
- (23) Nohl, Herman, *Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie*, Frankfurt am Main, 1935 (ノール, ヘルマン『ドイツの新教育運動』, 平野正久・大久保智・山本雅弘著訳, 明治図書, 1987年)。この著作は、1933年に編まれた『教育学ハンドブック 第1巻』(Nohl, Herman und Pallat, Ludwig (Hrsg.), *Handbuch der Pädagogik, Erster Band*, Langensalza, 1933) のなかの教育史の章の最終節「ドイツにおける教育運動 (Die pädagogische Bewegung in Deutschland)」と同巻所収の巻頭論文「人間形成の理論 (Die Theorie der Bildung)」をあわせて一冊の単行本として出版したものである。したがって、ドイツ新教育運動の展開過程について論じた部分の初出は、1933年ということになる。本章の注(22)の記述を顧みるならば、ノールとフリットナーは、ほぼ同時期にドイツ新教育運動の展開過程を全体として捉えようと試みていたことになる。
- (24) 批評文, 書評, 教育関係文献, 事典類などを調査し、ケイに関する記述を分析したキールマイヤー (Kielmayer, Ingeborg Elfriede) もやはり、「(ケイの著作に対する) 学問的に熟考され、専門的に方向づけられた、客観性をもった批判は、ようやく『散発的に』1930年くらいの歴史書のなかに現れるようになる」(括弧内は引用者) と述べている (Kielmayer, Ingeborg Elfriede, *Ellen Keys "Das Jahrhundert des Kindes" in der deutschen pädagogischen Fachkritik von 1902–1914*, Wien (Diss.), 1954, S.159)。
- (25) Scheibe, a. a. O., S.53.
- (26) Scheibe, a. a. O., S.52.
- (27) Scheibe, a. a. O., S.53.
- (28) Scheibe, a. a. O., S.51.
- (29) 『児童の世紀』を特に「子どもからの教育」の先駆的思想という点に重点をおいて位置づけた研究には、他に次のようなものがある。Reble, Albert, *Geschichte der Pädagogik* (1951), 15., vom Autor neu bearbeitete Aufl., Stuttgart, 1989, S.295–297. Blättner, Fritz, *Geschichte der Pädagogik* (1951), 2., verbesserte und erweiterte Auflage, Heidelberg, 1953, S.219–221 (ブレットナー, フリッツ『西洋教育史 人間形成過程の歴史的研究』, 中森善治訳, 新光閣書店, 1968年, 334–336頁)。Ruß, Willibald, *Geschichte der Pädagogik* (1952), 9., verbesserte Aufl., Bad Heilbrunn, 1973, S.145–147, usw..
また、「彼女 (ケイ) に着想を与えられた『子どもからの教育』」(Brezinka, Wolfgang, *Erziehung und*

- Kulturrevolution, Die Pädagogik der Neuen Linken, München und Basel, 1974, S.81), 「『子どもから』という教育運動の先駆者」(März, Fritz, Pädagogenprofile, Miniaturen großer Erzieher und bedeutender pädagogischer Denker, Donauwörth, 1982, S.220) や「この『子どもからの教育』の告発かつ道標」(Röhrs, Hermann, Die Reformpädagogik als internationale Bewegung 1, Die Reformpädagogik Ursprung und Verlauf in Europa, (Das Bildungsproblem in der Geschichte des europäischen Erziehungsdenkens, Bd. 16), Hannover, Berlin, Darmstadt, Dortmund, 1980, S.44) という叙述に類する表現は、ケイに触れた研究文献のほぼすべてに見受けられる。ちなみに、最後に挙げたレールス(Röhrs, Hermann 1915-)の研究は、シャイベの研究と並んで、戦後(旧西)ドイツを代表する新教育運動史研究であると評されている。
- (30) Flitner, Wilhelm und Kudritzki, Gerhard (Hrsg.), Die deutsche Reformpädagogik, Die Pioniere der pädagogischen Bewegung, Düsseldorf und München, 1961, S.52-63. この編述書の第一章「文化批判から生じた教育学的な諸帰結」では、ケイの『児童の世紀』からの抜粋がニーチェやラガルデ、グルリットの作品とともにとり上げられている。このほかに、フリットナーとレールスも、次のような形で『児童の世紀』を文化批判運動の一環あるいはその主張の具体化として位置づけている。「1902年にエレン・ケイの著作『児童の世紀』のドイツ語版が上梓されたが、それはニーチェの哲学をより衆知のものにした」(Flitner, Wilhelm, Reformpädagogik (1974), in : Ders., Die Pädagogische Bewegung, Beiträge - Berichte - Rückblicke, Besorgt von Ulrich Herrmann unter Mitarbeit von Christoph von Bühler und Meike Werner, Nachwort von Ulrich Herrmann, Paderborn, München, Wien und Zürich, 1987, S. 494. なお、原文では1900年となっているが、訳出の際に訂正した。)「ニーチェ、ラガルデ、ラングペーンの文化批判は原則的なものにとどまっていた。しかしそれは、エレン・ケイ、マリア・モンテッソーリ、ヘルマン・リーツらによってすでに始まっていた新教育の潮流の枠組みのなかで行われていた批判的な議論によって補われた」(Röhrs, a. a. O., S.43)。
- (31) この時期にケイあるいは『児童の世紀』を主題とした博士論文もいくつか提出されている。次にそれらを年代順に挙げておく。Erhard, Edmund, Die Spontaneitätsidee bei Ellen Key und dem "Hamburger Wendekreis", Würzburg, 1933 (Phil. Diss. Würzburg). Kielmayer, Ingeborg Elfriede, Ellen Keys "Das Jahrhundert des Kindes" in der deutschen pädagogischen Fachkritik von 1902-1914, Wien, 1954 (Phil. Diss. Wien). また、同時期にオランダで、ドイツの主要な文献を用い、精神科学的教育学の枠組みに沿ってケイの思想を解釈しようとした論文"Ellen Key, 's Gravenhage" ('t Hart, Willem Anne, 1948 (Diss. Leiden) が提出されている(Dräbing, a. a. O., S.434-436.)。ただし、ケイに関する博士論文がドイツではじめて提出されたのは、1922年に遡る(Richter, Erdmann Rudolf, Darstellung und Kritik der pädagogischen Ideen Ellen Keys, Leipzig, 1922 (Phil. Diss. Leipzig))。この論文は、スピノザ(Spinoza, Baruch de 1632-1677), ゲーテ, スペンサー, ニーチェ, ルソー, そしてモンテーニュ(Montaigne, Michel Eyquem de 1533-1592)らの思想とケイの教育思想の関連を明らかにし、彼女の教育思想の特徴を考察したものである。こうした論文が提出されているところを見ると、ドイツの新教育運動を顧みようという動きは、部分的にはあるが、1920年代から始まっていたといえるかもしれない。
- (32) Rechtmann, Heinrich J., Geschichte der Pädagogik, Wandlungen der deutschen Bildung, 3., neubearbeitete Aufl., unter Mitwirkung von Heinz - Jürgen Ipfling, München, 1969, S.309.
- (33) たとえば、次のような批判がそうである。「ケイは教育学上の個人主義を、彼女の批判も彼女の改革案もほとんど豊かに実らないような方法で、その価値をつり上げた。・・・(中略)・・・教育学上の意義は、この著作の人々の目を覚まさせる作用にあった」(Ruß, a. a. O., S. 146f)。 「(ケイやハンプルクの教師たちが主張した)『子どもから』の教育は、子どもの権利を力強く強調するとき正しいのである。というのも、まったく完全な子どもであった者のみが、真の男性とよき女性となることができるからである。しかしながら、客観的なもの、すなわち精神や慣習、秩序や規範に対する有意義な反論を反対極の否定にまで押し進めるならば、それは正しくないのである」(括弧内は引用者)(Blättner, a. a. O., S.221 (プレットナー前掲書, 336頁))。また、戦後のドイツ教育学界において経験的教育科学の重鎮として知られるブレツィンカ(Brezinka, Wolfgang 1928-)も、同様の見解を示している。「ほぼ同時代のデューイにおいてと同様に、ケイにおいては、今日でも刺激的なアクチュアリティをもつ、教育体制のはらむ現実的な不都合に関する鋭い分析が、『人格』の自己実現という非現実的な人間学的イメージと、徹底的に新し

い学校制度というユートピアとに結びついている」(Brezinka, Wolfgang, *Erziehung und Kulturrevolution, Die Pädagogik der Neuen Linken*, München und Basel, 1974, S.82).

- (34) ケイの教育思想がルソーの教育思想の影響を大きく受けていることは、彼女自身の告白からも明らかであり、それについて否定はしえないが、彼女の教育思想をルソーの系譜につなげるものと見なしうるかどうかについては賛否両論がある。たとえば、ケイを「ルソーの弟子 (Rousseau - Jüngerin)」(Schmid, Jakob R., *Freiheitspädagogik*, Reinbek, 1973, S.95), 「ルソーの精神的な娘 (Rousseaus geistige Tochter)」(Stengel, Georg, *Die Individualpädagogik, Ellen Key*, in: Zieroff, Franz, *Richtungen und Probleme in der Erziehungswissenschaft der Gegenwart*, 1. Teil, Nürnberg, 1924, S.13), ケイの思想を「新ルソー主義 (Ne Rousseauismus)」(Sturm, Karl Friedrich, *Die pädagogische Reformbewegung der jüngsten deutschen Vergangenheit, ihr Ursprung und Verlauf, Sinn und Ertrag*, Osterwieck und Harz, 1930, S.43) と呼ぶ人々がいる一方で、次のような見解を示す研究者もいる。「子どもに対する理解は、ルソーの思想を基礎として、エレン・ケイと彼女の革命的な著作によって、新たに教育のとり組みにおける中心的な主題となった。しかし、新しい子ども像は、すでにそれに遡る10年の間に異なる思潮によって用意されていた。新しい世紀の最初の10年間に、それ(新しい子ども像)は理論的な討議から学校現実のなかへと到達し、それによって変形し、(その変形の)影響は後々まで続いた。その根元は、しかしながらよくいわれるように一よりいっそう深かった。この根元は、いま明らかにされなければならない。その場合、ルソーやロマン主義に遡ってはならない。むしろ19世紀末の時代の潮流のなかに直接的な手がかりが示される。1. ニーチェらの文化批判のなかに、2. 青年運動のなかに、3. 現代の心理学のなかに、である。この諸思潮はすべて異なる観点から新しい子ども像をともに規定している」(括弧内は引用者)(Dietrich, Theo, *Geschichte der Pädagogik in Beispielen*, 18.-20. Jahrhundert, Bad Heilbrunn, 1970, S.188).
- (35) Rechtmann, a. a. O., S.300.
- (36) März, a. a. O., S.220. 引用文中の「粥のように柔らかい世界観の生地」とは、“ein weltanschaulicher Brei”の訳であるが、この“das Brei”には「粥、ジャム、糊」のほかに、「ぬかるみ、できそこないの物、幼稚な読み物」という意味がある。
- (37) 本文で挙げた戦後の研究文献は、旧西ドイツを中心にしたものであるが、ここで旧東ドイツのドイツ新教育運動研究のなかで『児童の世紀』がどのように理解されていたかについて触れておきたい。旧東ドイツの研究文献のなかでは、いわゆる市民階級批判の一環としてケイの『児童の世紀』が批判されている。すなわち、ケイは『児童の世紀』のなかで、子どもが階級によって区別されない学校を構想するなど、階級や社会制度の規制から解放された子ども像や教育思想を唱えたが、それは階級構造を隠蔽し、階級闘争から目をそらせるものであり、結局は帝国主義的な体制を保持することに貢献する論であったというものである(例えば、Hohendorf, Gerd, *Die pädagogische Bewegung in den ersten Jahren der Weimarer Republik*, Berlin, 1954, S.22f, usw.). ほかに、マルクス主義的な観点から、ケイは子どもの素質の内からの自然な展開を重視しすぎており、教育の領域における自然と人間の弁証法的関係、すなわち子どもの素質の展開と人間による意識的な作用としての教育行為との弁証法的関係を無視しているという点が指摘されている(Alt, Robert, *Über unsere Stellung zur Reformpädagogik*, in: *Pädagogik, Organ des Deutschen Pädagogischen Zentralinstituts*, 11. Jg., 1956, S.348).
- (38) Wilkending, Gisela, *Volksbildung und Pädagogik “vom Kinde aus”, Eine Untersuchung zur Geschichte der Literaturpädagogik in den Anfängen der Kunsterziehungsbewegung*, Weinheim und Basel, 1980, S.30.
- (39) Key, Ellen, *Das Jahrhundert des Kindes, Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro*, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel, 1992, S.12f.
- (40) 「生命の使徒」という名称は、ラーシェン (Larsen, Hanna Astrup) がケイの思想を紹介する論文の題名として用いたことから広く知られるようになった (Larsen, Hanna Astrup, *Ellen Key: An Apostle of Life*, *The Forum* for October 1911, pp.385-399).
- (41) Wilkending, a. a. O., S.29-33.
- (42) 注(3)を参照されたい。
- (43) Oelkers, Jürgen, *Die Wiederkehr der Postmoderne, Pädagogische Reflexionen zum neuen Fin de*

- siècle, Zeitschrift für Pädagogik, 33. Jg. 1987, Nr. 1, S.21-40.
- (44) 文化教育学は、いわゆる教育の普遍妥当性を批判し、教育がその時代、その社会の文化によって強く規定されると主張した点、デューイの教育論は、普遍妥当的な目的を否定し、終わることのない再組織化として生成の観点から教育を定義した点が評価されている (Oelkers, a. a. O., S.33f).
- (45) Oelkers, a. a. O., S.22.
- (46) Oelkers, a. a. O., S.25-28.
- (47) Oelkers, a. a. O., S.34.
- (48) Oelkers, a. a. O., S.34f.
- (49) Herrmann, Ulrich, Die » Majestät des Kindes « -- Ellen Keys polemische Provokationen, in : Key, Ellen, Das Jahrhundert des Kindes, Studien, Autorisierte Übertragung von Francis Maro, Neu herausgegeben mit einem Nachwort von Ulrich Herrmann, Weinheim und Basel, 1992, S.253-264.
- (50) Herrmann, a. a. O., S.255f.
- (51) Herrmann, a. a. O., S.256.
- (52) Herrmann, a. a. O..
- (53) それらの議論の内でも主要なものを所収した著作に、たとえば次のものがある。Baader, Meike Sophia et al. (Hrsg.), Ellen Keys reformpädagogische Vision » Das Jahrhundert des Kindes « und seine Wirkung, Weinheim und Basel, 2000 (Beltz Taschenbuch 63). Jahrbuch für Pädagogik 1999, Das Jahrhundert des Kindes ?, Frankfurt am Main; Berlin; Bern; Bruxelles; New York; Wien, 2000.
- (54) たとえば、次の論文が挙げられる。Reyer, Jürgen, Die genetische Verbesserung des Menschen im "Jahrhundert des Kindes"; Jahrbuch für Pädagogik 1999, Das Jahrhundert des Kindes ?, Frankfurt am Main; Berlin; Bern; Bruxelles; New York; Wien, 2000, S.115-130. Allen, Ann Taylor, Das Recht des Kindes, seine Eltern zu wählen : Eugenik und Frauenbewegung in Deutschland und Großbritannien 1900-1933, Baader, Meike Sophia et al. (Hrsg.), Ellen Keys reformpädagogische Vision » Das Jahrhundert des Kindes « und seine Wirkung, Weinheim und Basel, 2000 (Beltz Taschenbuch 63), S. 105-124. また、同テーマに関する筆者のこれまでのところにおける見解は、次の拙稿に示している。「子ども中心主義の教育学と優生学のインターフェイス-E.ケイ『児童の世紀』に見る<自律的な主体>であることという呪縛」, 教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第10号, 2001年, 235-247頁.
- (55) 今井康雄『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想-メディアのなかの教育』, 世織書房, 1998年, 16-23頁.

付記 本稿は、文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。